

ソウル大学図書館蔵

「伊勢物語注」について

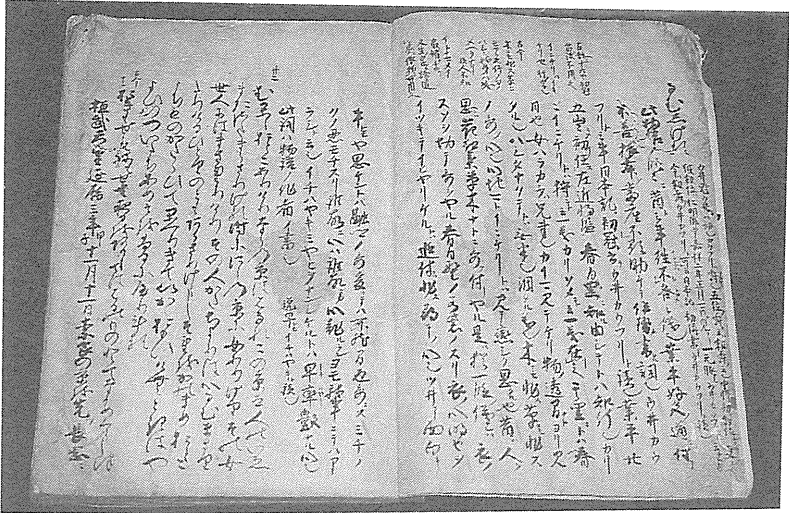
金 任 淑

一

ソウル大学図書館蔵伊勢物語注（以下、「ソウル大学本注」と略する）は、縦二五・三センチ、横一七・七センチの袋綴一冊本である。外題内題ともに無く、成立時期、著者、書写者などを示す奥書・識語もない。一面十二行書き、墨付七八丁で、江戸時代初期、おそらくは寛文・延宝の頃（一六六一―一六八一）の書写と思われる。この注釈書の構成は、平仮名体の『伊勢物語』本文に続いて、片仮名で注が加えられている。また、同じく片仮名体で、所々に頭注と行間書入注が見える。

注釈の性格を検討する前に、「伊勢物語」本文について簡略に述べておきたい。本文は定家本系統の中でも室町時代から江戸時代にかけて多く使われていた、いわゆる流布本第二類に近い。いくつか

例を示すと、「ついぢ」（五段、天福本「ついひぢ」）、「あねは」（十
四段、天福本「あねは」）、「かざりちまき」（五十二段、天福本「か
ざなりちまき」）「むかしおとこ女」（六十四段、天福本「むかしお
とこ」）、「山はへたてねど」（七十四段、天福本「山にあらねども」）、
「いたじき」（八十一段、天福本「たいじき」）などがある。すなわ
ち、この「ソウル大学本注」は、天福本に比べて、本文の整ってい
る当時の流布本のほうを用いているのである。しかし、必ずしもそ
うではない場合もある。例えば、「契たりけるに」（二十四段、流布
本「ちぎりけるに」）は、天福本と同じであり、「この大将たばかり」
（七十八段、天福本「かの大將いで、たばかり」、流布本「この大將
いで、たばかり」）は、両方とも一致しないのである。しかし、そ
のような例は極めて少なく、この注釈書が天福本でも武田本でもな



ソウル大学図書館蔵「伊勢物語注」(1ウ-2オ)

い当時の流布本を主に用いるという基本的な方針には変りがない。

二

本文につづく注釈部分は、種々の『伊勢物語』(以下、勢語と略す)注釈書を利用しているのであるが、中でも、特に「肖聞抄」の引用が注釈部分の大半を占めている。「肖聞抄」は、室町末期から江戸時代にかけて、もつとも広まっていた注釈書の一つで、他の注釈書においても頻繁に引用されたのであるが、他の注釈書においては、諸注を羅列する中で、その一説として「肖聞抄」を用いていることが多いのに対し、「ソウル大学本注」は、「肖聞抄」を根幹注として、他の注はそれに付加する形で用いている点が、同時代の他の注釈書との違いであると言つてよい。

それでは、「ソウル大学本注」が「肖聞抄」の説を如何に重んじ、またどのように用いているかを、以下、具体的な例に即しつつ、述べて見たい。

まず、(表1)に示すのは、明らかに「肖聞抄」に拠つたと判断される本文注である。

(表1)

58	31	27	段
「葎生 ひて」 の歌	草葉よ よしや	ぬきす	項目
鬼トハ女ノ事也。足立ガ 原ノ黒塚ニ鬼コモレリト 云モ女也。外面似菩薩 ニ内心如夜又トモイヘ リ。	如レ此云心、春草ノ若葉 モ秋ニ當テ枯行事ヲ思テ 業平ニヨソエテ云出テ恨 也。一禪ノ御説、人ノ死 タル跡ニハ草ノ生ズル物 ナレバト也。	ソウル大学本注(本文注) 注① タライノ上ニ竹ヲアミテ、 ヘリヲサシタル物ヲ渡シ テ其ノ上ニテ手ヲ洗也。	肖間抄(延徳本) 注② 盟の上に竹をあみて、へ りなどをさしたるなり。 それを上にわたして、其 上にて手をあらふ物也。
おにとは女のこと也。あ だちの原のくろづかにお にこもれりとさくはまこ とか。といふも女の事を 云り。外面似菩薩、内心 如夜又ともいふ云り。	かくいう心は、春の草の 若葉なるも秋にいたりて 枯行事を思ひて業平によ そへていひ出してうらむ る心也。一禪御説、人の なきあとには草のおふる 心とぞ。		

111	91	73
「下紐 の」の 歌		「目に も見て」 の歌
下紐ハ人ニ破ル恋時ト クル物也。サレバ其験シ トスルモ紐トケネバ、ソ	月日ノ行ヲサへ、此詞ニ 物思心見エタリ。サヘト 云詞、心アルベシ。時節 ノウツルモ悲カルベシ。 心明也。夕暮ニサヘト云 事切ニ思ベシ。	此歌万葉ニ少シカワレリ。 例ノ伊勢ガ作物語也。思 入ヲ月ノ桂ニヨソヘテ云 ヘル也。
下ひもは人に恋らる、時、 とくる物也。されば其し るしとする紐もとけねば、	むかし月日の行をさへ、 此詞に物思ふ心見えたり。 さへと云詞、心有べし。 時節のうつるもかなしかる べし。三月も尽にて、い と切なるべし。おしめど も春のかぎりの、心はけ ふの日の夕ぐれにさへ成 にけるかな。歌の心は明 也。夕暮にさへといへる 所、切に思ふべし。物思 ふ身の上に、春さへ暮行 心をふかく思慮すべし。	此歌も万葉の歌にすこし かはれり。例の伊勢が作 物語の意趣也。思ふ人を 月のかつらによそへて云 也。

112	111	
	「恋し とは」 の歌	
異様ニ成ルトハ他人ニ心 カワス也。異人ニナビク ヲ塩ヤク煙ニタトヘ云也。 餘情深シ。	此返事ハ女ノ哥ニ云如ニ 恋シカラネバコソ紐ハト ケ侍ラネト云ヲ兎角サガ ハデ、女ノ心ニ打任テ下 紐トケバ恋シト知レト云 ル也。	ナタノ詞ノ如クハ恋ジト モ思ハヌニテコソアレト 云ル也。
どよく思ふべしとぞ。 さしき哥也。詞づかひな 也。此歌又余情ふかくや びくを塩焼煙にたとへ云 にけり。心はこと人にな むかし男ねんごろに、こ とざまになるとは、他人 に心かはす也。すまのあ まの塩やく煙風をいたみ おもはぬかたにたなびき びくを塩焼煙にたとへ云 とよく思ふべしとぞ。	此返しは、女の歌にいふ ごとくには恋しからねば こそ紐はとけず侍れとい ふを、とかくさわがで、 女の心に打まかせてした ひもとけばこひしとしれ と云る也。	そなたのいふごとくはこ ひしとおもはぬにてこそ あれと云る也。

二十七段、三十一段、五十八段、七十三段、百十一段などの注は、ごくわずかな表現の相違はあるが、「肖聞抄」そのままの形となっている。そして、九十一段と百十二段は注全体が「肖聞抄」の内容を縮約して用いている。

以上の例から、この注釈書が「肖聞抄」を重んじていることを確認したが、ここで一つ注目すべきは、この注が「肖聞抄」の諸本の中でも、延徳本系統の本文に依據しているらしいということである。延徳本は、現在一番流布している文明十二年本より十年余り後に成立したもので、文明本より詳しい注釈内容をもっている場合もある。今、ここに挙げた項目の注に限っても、傍線部分は文明本にはなく、延徳本にある内容であって、この注はより詳しい注釈内容をもつ延徳本を用いていることがわかる。

なお、(表上)に挙げた注以外にも、「ソウル大学本注」の中で「肖聞抄」が占める割合は圧倒的に大きい。中では、「肖聞抄」だけではなく、「肖聞抄」と同じ宗祇流の注釈書の説が並用されている場合もある。(以下、傍線部分は他の宗祇説の注である)

・六十三段「むばら、からたちにかかりて」

アハテ、道ナラヌ所ヲ迷タル心也。

・百十段「思ひあまり」の歌

出ニシ玉ノアルナラントハ、夢ニ見タル由ライヘバ、如斯云

也。夢ハ魂ノ所作ナレバ、我君ヲ思フ魂ヲソナタニ結留テヲケト云心也。ウカレ玉ナド見タル時、マジナフ事アリ。

・百十三段全体

業平ヲ思捨タル女ノアリシ時ノ事ナルベシ。哥ノ心明也。此哥ニ取テ一首ノ内ニ長短ノ二字ヲ読入テハアシカルベキヲ而モ心詞幽シテ明也。尤面白シ。

・百十四段「仁和の帝」

仁和御門ハ光孝天王ノ御事也。又ハ小松院トモ申ス。仁明第七ノ御子也。

まず、六十三段の「むばら、からたちにかかりて」の注は、「肖聞抄」にはないが、「宗長聞書」の「心あはて、みちならぬ所などを帰りたるさま也」とあるのに一致している。次に、百十段と百十三段の注は「肖聞抄」の説に、「山口記」を付加している例であり、百十四段の「又ハ小松院トモ申ス」は、「宗長聞書」からの引用である。

また、次のように、宗祇説の注であっても特定の一つの注からの引用ではない場合もある。

・六段「弓やなくひをおひて」

貞観六年ノ比也。但此時弓ヤナグイヲ負ベキ事如何。作事ナルベシト祇公ナドハ云ヘリ。

これは、「祇公」云々と示しているが、必ずしも「肖聞抄」だけではなくほかの宗祇説の注釈書にも見える内容であることから、おそらく「祇公」の説という言い方をしている例である。

このように、「ソウル大学本注」は「肖聞抄」を中心とし、他の宗祇流の注をも部分的に取り入れているのがわかるが、そのことから、一見宗祇派の末流の人の手によるものではないかとも思われるわけであるが、しかし、一方においては、清原宣賢の「惟清抄」、細川幽斎の「闕疑抄」、一華堂切臨の「伊勢物語集注」（以下、集注と略す）などと言った、宗祇以後の三条西家流の注釈をもしばしば用いているのである。

以下、「惟清抄」や「闕疑抄」「集注」に拠ったと判断される注をいくつか挙げて見よう。

・初段「かりにいにけり」

カリニイニケリトハ狩ニト云一義、カリソメニト云一義在レリ之。

・十八段「なま心」

好色ノ不熟ノ心ヤ。生ノ字也。

・六十五段「くらにこもりて」

ヌリゴメナド云所ナルベシ。

まず、初段の「かり」の語句を「仮（または、仮そめ）」と解釈

するようになったのは三条西家の注、具しくは「**闕疑抄**」の「かりにいにけりを、飯にとも、あそばされし也」の記述からである。また、十八段の「なま心」の注も宗祇流の諸注は「よからずあしからずと云ほどの心なり」(肖聞抄)としており、「生」の字を当て、その上「好色」の心と説くのは、やはり「**闕疑抄**」の「物ずきの女也。なま心、(略)じゆくしたらばよからん、貞の心はなまき心也。なまきの上達部など云心也。好色の女の心也。」以後からである。六十五段の「くら」を「ぬりごめ」とするのは、「**惟清抄**」の「ぬりごめなどの内にをく也」の注からであり、「**闕疑抄**」「**集注**」なども同じ注釈を付している。

さらに、「**惟清抄**」「**闕疑抄**」には見えず、「**集注**」に拠ったと思われぬ説もある。まず、読癖の一致を示す場所であるが、十四段の「うとき人」に対して、「外人ト書テウトキ人ト読也」と注したり、六十五段の「陰陽師」に、「オンミヤウジト可読也。」などがある。これは、「**集注**」に多数に見える読癖を取り入れた例であろう。また、読癖にとどまらず、内容的にも「**集注**」に一致する注も少なくない。今、一、二例を挙げて見ると、

△三段「思ひあらば」歌の注

・思アラバ玉桜金殿モ何かセント也。何ニセンニ玉ノ臺モ八重葎ハエラン宿ニフタリコソネメ此心也。

・(略)万何せんに玉の臺も八重葎はへらん宿にふたりこそねめ、此哥の心也。独は玉樓金殿にもいやと也。

(集注)

△八十二段「おしなべて」歌の注

・此哥又明也。是モ時ノ興、挨拶也。尤珍也。只ノ時如此ヨマシ事ハ平懐過テアシク侍ラン歟。

(ソウル大学本注)

・(略)肖聞云、此二首只の時よまば平懐過であし。爰にては時の興にして面白し。

(集注)

などがあるが、八十二段の場合、「**集注**」では「肖聞云」と、いかにも「肖聞抄」によったかのように言っているが、実際、文明本・延徳本などにはこのような記述がないことに注意したい。「**集注**」の中には、「肖聞云」と言って実際の「肖聞抄」の諸本にはないケースがほかにも多いので、この「ソウル大学本注」が「**集注**」から直接その説を引いていると見て差し支えないだろう。

このように、「ソウル大学本注」の本文注は、宗祇の説、中でも「肖聞抄」の説を主軸とし、「**惟清抄**」「**闕疑抄**」それに「**集注**」などの三条西家の注も取り入れており、そこから単なる宗祇末流の注

「釈書ではないことがわかるが、さらに加えて、本文注には「愚見抄」の引用も少なくないことが指摘できる。

以下、本文注に用いられている「愚見抄」の説をいくつか取り挙げて見ると、(表2) のようである。

(表2)

段項目	ソウル大学本注 (本文注)	肖聞抄	愚見抄
90 歌	「桜花 今日こ そかく も」の 歌	心ハ逢難キ人ノ 明日ナント云非 悦「又難キ契ヲ 読リ。前ノ詞ニ テハ心アラハ也。 ト云心バエモ 可シ有ル。上ノ	心はあひがたき 人のあひなんと いふをうれしな がら、猶たのみ がたき心をよめ り。前の詞にて 心あらはなり。
65 ひて	なにの よきこ とと思 ひて	又さとへ出給ふ をなにと思ひ て。それこそよ きことよと思ひ て又里へ行也。	此女、さとすみ すれば、それを ばなをよき事と 思て、又さとへ 行也。されば、 なにのは、うち ふてたる心也。

105	なめし	無キ便「事也。 ヤンゴトナキ人 ヲ思シニヤ。又 ナメシトハ無礼 ト書也。返歌ノ 言ノナサケナキ ヲ云。	びんなき事也。 やむごとなき人 を思かくる儀也。	どに。たのみが たきと読る也。
			なめしとは、無 礼と書てよめり。 けなばけな、ん とよめる歌を無 礼なるといへり。 なさけなき心な るべし。	

ここに挙げたのは、「肖聞抄」を用いたあとに、「愚見抄」の説(傍線部分)を付け加えた形であり、この注釈が「肖聞抄」によつた後、さらに研究して「愚見抄」を加えたことがわかるのであるが、後から付加したにしても、宗祇説より「愚見抄」の説を優先して用いている場合もある。まず、三十段「玉のを」の注を見ると、
逢事ハ玉ノ緒計トハ、露計ニテ思ハ切ナル心也。念珠一クリノ
間也。命ヲモ玉緒ト云也。

とあり、前半は「肖聞抄」と一致しているが、「命ヲモ玉緒」とす

る部分は、「愚見抄」の、

玉のをといふは、みじかき物なれば、かくよめり。これによりて、命をも、玉のをといふなり。

から扱った説であるのに間違いないが、それが「宗長聞書」の「此玉の緒は、いのちにあらず」の説とは反対の立場であるのが確認される。この「命」説は、宗祇流の注は勿論、三条西家の諸注にも用いられなくなったのに対し、「ソウル大学本注」がそれを用いているのは興味深いことである。同じような例は、初段の「うめかうぶり」注にも見える。

日本記ニ初冠ト書テウキカウプリト読也。業平廿五歳ニテ初テ任ズ。左近将監。

「うめかうぶり」に関する解釈は、宗祇以後のほとんどの注釈書が「元服」説を主張するのに対して、この注は「愚見抄」が説く「叙爵」説を用いているのに注目したい。さらに、百二十段「つくまのまつり」に関しては、

此古事ハ常説ナレバ不及之ヲ。筑麻ノ大明神ノ祭ニハ女ノ男持タル数、鍋ヲ戴テワタル也。恥ガマシキ祭ニナンアリケル。

とあるが、ここでは、傍線部分に注目したい。「肖聞抄」及びその以後の諸注は、「人あまねくしれる事なれば不及之を。」（「肖聞抄」）とあり、この注の冒頭部分はそれらによっているのであろうが、こ

の注はそのあとに「筑麻ノ大明神ノ祭ニハ」と、宗祇以後には用いられなくなった「愚見抄」の説をそのまま付加しているのである。一度「常説ナレバ不及之ヲ」としたあと、もはや用いられないその常説を再び述べるということは、不自然であると言わざるを得ない。これは思うに、この傍線部分の説が、冒頭部分と同時に書かれたのではなく、そののちの段階で補入されたのではないかと考えられる。即ち、一つの語句の注の中に成立次元のずれが見えるわけであるが、これは今から述べる頭注・書入注にも関わる問題ではないかと思われる。

三

今までは「ソウル大学本注」の本文注について考察して見たが、この注には、所々に、頭注と行間書入注が施されている。本文注以外にこのような注が散在するということは、この書が一度に作り上げられたものではないことを意味するのであるが、本文注が「肖聞抄」を中心とする宗祇流の注を主に用いているのに対して、頭注と行間書入注は、「愚見抄」の説が大半を占めている。これは、前述した、一つの語句の注の中に成立次元のずれが見えた本文注とも相通じるものであって、本文注の中での「愚見抄」の説も、宗祇流の注のあとに書き加えられた可能性を暗示するものである。

以下においては、頭注と行間書入注に見える主な性格を検討して見たいが、両方はおおむねその性格が似ていると判断されるので、同時に考察を進めて行くことにする。

まずは、「愚見抄」をほぼそのままの形で引用しているか、あるいは、表現がやや異なっているか、「愚見抄」の説に間違いのないのを挙げてみる。

(表3)

段	項目	頭注	愚見抄
4	にしのたい	南ノ寝殿ニ相並テ西東ニアル殿ヲバ西ノ對、東ノ對ト言也。	南の寝殿にあひならべてにしひんがしにある殿をば西の對、東の對などいふなり。
23	「筒井つの」の歌	昔ハ貴賤俱ニ丸ト云ケル。妹ハ惣テ女ヲ云也。	むかしは、我身を称して丸といへり。(略) 妹はたゞ女をいふなり。
29	東宮の女御の花の賀に	古今ノ一二、文屋康秀ガ春ノ日ノ光ニアタルトヨメル歌ノ詞ニ、二条ノ后ノ東宮ノ御息所トキコエケル時トカケリ。御息所に	古今集第一、文屋やすひでが春の日の光にあたるとよめる歌の詞に、二条のささきの東宮のみやすん所ときこえける時とか

120	「近江なる」の歌	拾遺ニハ二句カワレリ。先初ノ五文字ハ、イツシカモ、三ノ句ハ、ハヤセナント云リ。	此歌、拾遺集第十九に入たり。初五文字を、いつしかもとかたかへたり。又、はやせなんとあり。
117	り	不レレバ見不レ是「信用」ニ。	に信用にたらず。
93	いとになき人	一禪説ニハ、ニナキハ類ナキ人ト云心也。	になきは、二つなきなり。たぐひなき人といふ心なり。
44	「いでて行く」の歌	モモナカラント云心也。	たる也。
		トハ女御ノ御事也。	けり。みやす所は、女御の御事也。
		一禪云、我サへ裳ナクトハ、行人ニ心ヲバタガエヤル程ニ、部ニ残留ル我ながら、なきがごとく成	我さへもなくとは、出て行人に心をたぐへやるほどに、都にのこりとまりながら、なきがごとく成

まず、四段、二十九段の場合は「愚見抄」をそのまま引く形であり、特に、九十三段の注は、わざわざ「一禅説」と示している。それに、百十七段の注も語順の違いはあるが、表現・内容とも一致している。また、二十三段、四十四段、百二十段の場合は、表現はやや相違があるが、「愚見抄」の説であることに間違いない。

次は、行間書入注の場合である。

(表4)

初	段
	項目
	行間書入注
	愚見抄

51	13	
歌	「問へば言ふ」の歌	初位とかきて、うるかうぶりとよめる也。
「うへしうへば」の	歌二問エバイフトハ、問フトキハウルサシト云、問ネバ又恨ル。故ニカ、ル時ニコソ人ハ思煩テ死スル物ニテハアリヌベシト云也。	歌の心は、とへばとふとていふ。又とはねばとはぬとてうらむ。かゝる折に、人は思わづらひてしぬる物とよめる也。
一禅云、ウフルトウフルトナラバト云心也。		うふるとうふるとならばといふ詞也。

行間書入注は、頭注よりはその数が少ないが、その多くが「愚見抄」の説である点では、頭注と同じ傾向を見ている。

しかし、本文注でも見た傾向とも重なるが、頭注・行間書入注の場合も、「肖聞抄」以後の諸注においてはほとんど通用しなくなった「愚見抄」の説を取り入れてある点にその特徴が見られる。例えば、

・四十四段「心とどめてよます」の頭注

一禪ノ説ニハ、心留テヨマスノ字ヲ濁テ読テ、此哥ノ面白
ヲ深ク感ジテ返哥ヲセズト云心見り。

の場合には、「愚見抄」の、

此哥のおもしろさに、中々返歌に及ばぬと也。はらにあちはふ
とは、心服に翫味する心なり。

の説をやや表現を変えて書き入れているのであるが、「肖聞抄」を
はじめ、「闕疑抄」「集注」に至るまでの旧注全般においては、「よ
ます」と「す」を清音に読んで「よませる」と解釈しており、「愚
見抄」の「よます」とする説をとる注釈書はほとんど見当たらない
のである。

次は、「愚見抄」以外にどのような注がこの頭注・行間書入注に
用いられているかを簡単に見ておきたい。まずは、本文注の中心を
なした「肖聞抄」をはじめとする宗祇説の注が引用されている場合
である。

・三段「思ひあらば」歌の頭注

肖説、葎ノ宿ニ思ノ有ハ非ズ。恋路ノ思アラバ也。云心ハカク
計堪難キ思アラバヒツ數物ニハ袖ヲシテ葎ノ宿ニネテモ思ダニ
モナクハアリナント云心也。

・十八段「くれなゐににほふはいづら」歌の頭注

白菊トハ業平ノ心ノ色見エヌヲ云也。白ハ本色ニシテ未レ移故

也。業平ヲ勘弁シタル哥也。

まず、この二列は、「肖聞抄」とほぼ同じ記述になっている注で
ある。特に、三段は「肖説」と明らかに示している。また、五十二
段「かざりちまき」の頭注、「アヤメニテチマキヲユフ事ハナケレ
ドモ、當日ノ事ナレバイヘリ。」の場合は、「肖聞抄」のほか「山口
記」にもある内容であるし、八十二段「たなばたつめ」の頭注、
「ツメハツマ也。メトマトハ通ル也」は、「肖聞抄」より、「宗長聞
書」により近い形となっている。

このように、本文注の根幹をなした宗祇流の説は、頭注において
も用いられているのであるが、おそらくこれは、本文注において記
し残していた宗祇の説を頭注の段階で補ったものと見てよからう。

次に、「集注」から拠ったと思われる説もある。まずは、「集注」
だけと一致する読癖の例であるが、「サガハ不詳也。又ハ悪ノ字ヲ
モサガトハヨム也」(三十一段「さが見む」の頭注)、「或説、メカ
ルルハ目別也。上略シテ云也」(四十六段「目離るとも」の頭注)
などが挙げられる。さらに、読癖以外にも、「集注」に拠ったと認
められる場合がある。例えば、
・七十六段「此神にまうで給けるに」の頭注

奈良ノ帝ノ御時、鹿島達トテ神護景雲元年二三笠山ニ奉レ振、

春日明神ト奉レル名歟。(下略)

は、他の注釈書には見当らない内容となっているが、「集注」の、

師云、(略) 四十八代稱徳天皇の神護景雲一年に大和の国三笠

山に此御神始て跡を垂たまふ。(下略)

とはほ似ているのである。「集注」説の引用は本文注にも見えた傾向で、正統的な三条西家流の「開疑抄」と、正統性からはややかけ離れた「集注」の説を同時に用いているということは、この書がそのような主流・非主流にこだわらず、より網羅的角度で諸注を取り入れるという柔軟性を持っていることを示すものである。

四

ここまでは、「ソウル大学本注」の性格をその成立次元の相違上、本文注と頭注・行間書入注とに分けて考察してきたのであるが、当時あまり用いられなくなっていた「愚見抄」の説を復活させたり、三条西家の影響下の注を用いたりする面では、本文注と頭注・行間書入注は一貫性を示していると言えよう。

以下においては、さらに本文注と頭注・行間書入注に一貫して見えるこの注釈書だけの特異な説、あるいは独自説を中心に、この注釈書の性格をより一層明らかにしておきたい。

この注釈書全般にわたって見える特徴の一つとしては、まず、古注及び古注的発想の残存が挙げられる。その中のいくつかを挙げて

みると、

・十段「たのものかり」の行間書入注

古註ニハ、田面ノ祭トテ婢ニナラント云人ノ名ヲ二ツモ三ツモ

書テ田ノ廻ニ札ニ書テ立テ、其中へ雁ヲ放テバ吉ベキ人ノ方へ

飛行也。此心ヲヨメリ云云。

・四十六段「いとるはしき友」の本文注

此友ハ有常也。

・六十三段「世心つける女」の本文注

世心ツケル女、ハヤ好色ノ沙汰無程ノ年比也。

・百十四段の頭注

此段以下、業平ノ二男滋春ノ書継ト申伝タリ。

などがある。まず、十段の「田面の雁」は、内容的に冷泉家流古注に一番近いし、「古註ニハ」というのは、この冷泉家流古注を指すのであろう。また、百十四段であるが、このように百十四段以下の章段を時代的に業平死去以後の内容であることから、その作者を滋春とするのも、やはり冷泉家流古注に似ている。ちなみに、「愚見抄」及び宗祇以後の旧注は、この段以下の章段においてはその作者を伊勢と見ている。次に、六十三段の場合は、「世心つける女」に對して、「好色ノ沙汰無程ノ年比也」と注しているが、それは「和歌知頭集」の、

よ、ろとは、おとこは女にあはんとおもひ、おんなは男にあはんとおもふこ、ろ也。然るに、此女は、さかりすぎ、としたければ、おとこにあはむとおもふ心もつきてなくなりたりける。

(高原本系統・六十三段)

といった内容と似通っているのである。それに対し、「肖聞抄」は「嫁したる女」と注し、また「闕疑抄」は「色々しき心のおとなしきはなき好色なるべし」と説くように、旧注全般においては「好色の心つける」と解しているのに対し、この書は知頭集系統の諸注と同様、「(心) 尽る」という解釈を行なっているのである。一方、四十六段「うるはしき友」を「有常」とするのは、中世古注にこそ見えないが、それに実名を当てるといふ面では、古注的発想が残存している例である。これに対して、「愚見抄」以後の旧注はすべてこの「友」に実名を当てていない。勿論、旧注においても物語の登場人物に実名をあらわすという古注的やり方が残っていないわけではないが、この実名のある方はこの注独自のものであるのに、その特異性が認められるわけである。

このように、この注釈書の特徴の一つとして、古注もしくは古注的発想が残存していることを確認したのであるが、ほかにもこの注独特の性格が窺える部分が多い。中でも、初段の冒頭部分の記述は

きわめて特異な内容となっている。

此物語ノ段々ニ昔ト云事、往不^{イシツバ}レト^ト咎云儀也。業平好色ノ道付テ不善振舞ヲ当座不^{イシツバ}頭、助ケテ伊勢ガ書タル詞也。^⑤

(初段の本文注)

まず、①の、伊勢物語の各章段の初めに、「昔」と書くのは「往不レト咎」ためだとする内容に注目したいが、それと一致もしくは似ている注釈書は古注はもちろん、旧注においてもほとんど見当たらない。しかし、一つ、その前後関係ははっきりしないが、大津有一氏の「伊勢物語古註釈の研究」(増訂版)の第二章第五二の中に短く紹介されている、京都大学図書館所蔵の伊勢物語とだけ題した作者不明の注によると、「(略) 往をばとがめずと云本文あれば」云々とする記述がある。

推測にはすぎないが、この「ソウル大学本注」のほうが断定的な言い方になっているので、その「本文」である可能性も考えられるのではなからうか。

次に、②のように、伊勢が物語を書く際、業平の「不善振舞」(具体的に上上の「好色」的行動であろう)を隠すため、実名をあらわさずに、「昔男」と書いたとするのもめずらしい説である。勿論、勢語の作者を伊勢と見るのは、古注のみならず旧注においても受け継がれている説であって、それ自体は問題にならないが、業平

と伊勢の関係（伊勢が業平をかばうこと）をこのように把握するのはユニークである。

また、これと似たような内容は、六十九段の「なにごとも語らぬに帰りけり」の本文注にも見られる。即ち、「誠ニ逢タル事ナレドモ夢の如ナル心ニテ如此書也」とした後、「又一説、物語の作者、業平ヲ助テ書トモ云也」の如く、業平の好色的行動、ここでは齋宮との密通を伊勢が弁護するために、「なにごとも語らぬに帰りけり」のように書いたのだとする見解を一説として取り挙げているのである。

さらに、「ソウル大学本注」には、歌の引用が多いことも注目したいが、それも他の注釈書には触られていない歌が多い。いくつか例を示すと、

・二十四段「梓弓真弓槻弓年を経て」の本文注

此哥ヲ取テ定家卿、梓弓真弓槻弓盡モセズ思ヒ入トモナビク世

モナキトヨメリ。

・四十五段「そのこととなく」の頭注

ナレシ秋ノ更シ夜床ハソレナガラ心ノ底ノ夢ゾ悲シキ 實家

・五十五段「思はずは」の本文注

招月ノ哥ニ、聞捨ガタキフシモ有ケリト云心モ大方相似シタル也。

のように、他注にはまったく見られぬ歌の引用が多いのである。この注釈をまとめた人は、歌に關してもかなり豊かな知識を持っており、それがごく自然に吐露されていることがわかるのである。

さらに、歌の引用にとどまらず、この注をまとめた人の豊富な識見、言い換えれば、独創的とも言える学問的見識は、この注が「肖聞抄」をはじめとする正統的な宗祇・三条西家流の説を重んじながらも、あながちそれを無条件的に用いたりはいはしない態度にもよく顕れている。たとえば、百十六段「はまびさし」の本文注において「師ノ説ハ真砂ノ儀也。但、人ノ好ニヨルベシ。」のように、「肖聞抄」によって「師」の説、すなわち宗祇の説をあげながら、必ずしもその「師ノ説」に従わなければならないわけではなく、「人の好ニヨルベシ」と述べているし、九十九段「右近の馬場のひをりの日」の本文注の場合も、

僻案抄ノ儀ニ、五日ハ左近ノヒヲリ、六日ハ右近ノヒヲリ也。

（略）其ノ時、裾ヲヒキ折テキル故ニヒヲリト云云。又、古今集ニモ此事有り。師ノ説可シ尋ヌ之ヲ。

の如く、「師ノ説」の由来をさらに追究すべきであると言っているのである。

また、宗祇から三条西家流の注に受け継がれていた説に批判を加えている場合もある。

・四十四段「いでていく」歌の本文注

必ズモヲヌグニハ非ズ。モナクト云事ニヨソヘテ如此云リ。

・百一段「左中弁藤原の良近」の本文注

私云、此左中弁、伝云、貞観十二年正月右中弁、十六年転左中

弁云。不審。其故ハ行平ノ伝ニ貞観十二年参議五十三、二月

廿六日兵衛督、十四年藏人頭ト見ユ。然者、行平左兵衛督ノ時

分ハ冒近ハ右中弁タリ。本ノ相違歟。

まず、四十四段の「裳を脱ぐ」の語句に対して、「肖聞抄」は

「きたるをぬげば、もなくなると云儀也」とあり、また、「惟清抄」

も「出て行人の為に、衣をぬぎてやれば、我さへもなくなると也。」

〔闕疑抄〕も同じ〕のように、着ていた裳を脱ぐことよって、喪

（わざわい）がなくなるといふ解釈に対して、この注は「裳をぬぐ」

行為を直接的に取らず、比喩として見ていることに解釈上の発展が

見えるのである。百一段の場合は、傍線部分までは「肖聞抄」「闕

疑抄」などにも見えている内容であるが、それらの説に「不審」と

断言したあと、「三代美録」に見える「行平ノ伝」を根拠とした実

証的な方法で、既存の宗祇・三条西家流の諸注にそのまま用いら

れていた「左中弁良近」説を否定し、「右中弁」とあらためているの

である。このように、この注釈書は、室町時代から江戸初期に至る

まで主流を成していた宗祇・三条西家の注などを盛んに用いながら

も、必要に応じては、それを批判したり、修正を加えたりするとい
う学問的な一面をも持っていることに注意したのである。

五

伊勢物語の享受史・注釈史の中で、室町末期から江戸初期は、言
わば諸注集成が流行していた時期で、早くても「集注」以後に成立
したと推察されるこの「ソウル大学本注」もその時代の流れの中で
作り上げられた注釈書の一つである。

しかし、この書が諸注集成と異なるのは、今まで見てきた通り、
諸注の単なる羅列ではなく、それを取捨選択するという姿勢にある。
要するに、この注にはこれをまとめた人の学問的姿勢が明らかに示
されているのであるが、それは、歌に関する豊富な知識を示したり、
既存の説に対して私見を付け加えたりしているだけではなく、当時、
宗祇・三条西家流の注に庄倒され、影が薄かった「愚見抄」を、そ
の実証的性格によって復活させたりすることからも察せられるので
ある。

すなわち、この注釈書は、伊勢物語をまじめに研究している人が、
講義のため、最初の段階では宗祇流の説を中心としてまとめ、次々、
他の注釈書類も収集し、そこからいいと思う内容だけを抜粋し、自
説と共にそれを書き加えるという過程を経てまとめられた、言わば、

研究ノートの性格の注釈書であるときではなからうか。また、そういう性格から、この「ソウル大学本注」は、当時、主流であった宗祇・三条西家流などの正統的流れをくむ注というよりは、その正統の領域を越え、より網羅的角度で諸注を取り扱うという、客観的性格が強い注釈書になっているのである。

しかし、そのように既存の正統的注釈書類よりはやや進歩的とは言うものの、一方では依然として、勢語を伊勢によって作られた物語と見たり、古注的発想が残存するなどの点は、契沖からはじまる実証的注釈や旧注否定の姿勢とは異なっている。今は、契沖の画期的注釈が作られる前に、学問的志向を見せる伊勢物語の注釈書が存在していたということだけを報告しておきたいと思うのである。

(注1) 読解の便をはかり、私に濁点・句読点を施した。

(注2) 以下、延徳本系統の「肖聞抄」の引用は、続群書類従第18

輯下所収の本文による。

(注3) 片桐洋一先生の「伊勢物語の研究・資料篇」の本文による。

(注4) 「山口記」の百十段、百十三段の注は以下のものである。

「(略) 夢はたましひの所作なれば、我君を思ふ玉しひぞみえつらん。玉むすびをせよと云へる也。かく云は我玉しひをそなたにむすびとめてをけとしたふ心也。玉むすびとは

うかれたる玉などみわたるをまじなひする也。」(百十段、
「(略) 此歌三十一字の中に、長短の二字をよみ入てはあし
かるべきに。しかも意詞優に明なること。心おもしろき歌
也。」(百十三段) 以下の引用は、(注2)と同じ。

(注5) (注3)と同じ。

(注6) 以下の引用は、続群書類従第18輯下所収の本文による。

(注7) 以下、「集注」の引用は「鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊」
七・八所収の本文に拠る。なお、濁点・句読点は私に施し
たものである。

(注8) (注3)と同じ。

(注9) (注3)と同じ。

〔付記〕貴重な御蔵書の閲覧と写真掲載をお許し下さった、ソウ
ル大学図書館に厚く御礼を申し上げます。

(キム イムスク 関西大学院生)